靴着用時の姿勢と意識

○奥村 董（滋賀女子短期大学）

福井 弥生，畠山 絹江（京都女子大学家政学部造形学科）

林 仁美（成安造形短期大学）

A Study of the Posture and Consciousness in Putting on Shoes.

Sumire OKUMURA.(Siga Women's Junior Coll.)

Yayoi FUKUI, Kinue HATAKEYAMA.(Kyoto Women's Univ. Econo.)

Hitomi HAYASHI.(Seian coll. Art and Design.)

1 はじめに

私達は、前報¹⁾においてヒールの高さの異なる靴着用による、姿勢の変化を検討するために、重心位置を測定し、シルエット写真から重心と姿勢の関係について考察した。

本報では、ヒール高の違いによる姿勢の特徴を検討するために、裸足時と靴着用時におけるシルエット写真の撮影および計測を行った。また、被験者の姿勢に関する意識と、シルエット写真からの身体計測値との関連についても、検討を加えた。

2 方法

被験者は、18～21歳の女子学生 118名である。

資料は、これらの被験者の裸足時と靴着用時のシルエット写真からの読み取り値45項目、および直接法で得た足部計測値19項目と、靴と姿勢に関する意識についての、アンケート調査結果である。

計測時期は、1994年5月～6月である。

シルエット写真撮影の条件、計測方法は、前報と同様である。

3 結果および考察

3.1 計測値

裸足時、ヒール高3、5、7cmの相隣なる平均値の差の検定を行った結果、厚径項目、高径項目

に認められ、裸足と3cm、3cmと5cm間に顕著であり、これらからヒール高の違いによる、姿勢の変化がうかがえる。

ヒール高別にシルエットの変化を見ると、ヒールが高くなるに従って、胸部の前径は大きくなり腹部の前径は減少して、反身体の傾向になることが分かった。

体型別にみると、肥満型ではヒール高が3cmから5cmと高くなるに従い、前径の比率が大となり、特に下腿部において他の体型とは異なる様相を示した。

3.2 主成分分析

姿勢の要因に寄与すると思われる26項目に縮約して、主成分分析をした結果、ヒール高別には大きな差はなく、第1因子は「体の大きさを表す因子」、第2因子は「側面から見た前径の因子」、第3・第4因子は「前面・側面のシルエットを表す因子」と解釈できる。

体型別に因子得点を求めた結果、第3因子は体型により顕著な差がみられ、体型に左右される因子と考えられる。

3.3 アンケート結果

姿勢に関する意識についてのアンケート結果では、姿勢についての関心は高く、その重視項目として腹部の出方、脊柱の湾曲、ウエストのくびれ、

大腿部の太さなどが揚げられた。

被験者の姿勢に対するイメージの構造を探るために、これらのアンケート結果を、数量化理論Ⅲ類により分析した結果、第1は頭部、肩部、胸部、腹腰部、下肢部にわたる姿勢のイメージ用語に、大きいカテゴリーウェイトを示し、「身体スタイル全体のイメージ」の因子、第2は腹部の出方、殿部の突出、頸の長さ、太さ、ウエストのくびれ、脚の湾曲に高く、「女性らしい身体シルエット」の因子、第3は胸部・腹部の大きさ、出方、ウエストのくびれ、下肢部の太さ、長さにウェイトが

高く、「若い女性の気にする身体形態のイメージ」の因子と解釈できる。

姿勢に対する意識に及ぼす要因としての計測項目をみるために、アンケート結果と計測値の分散分析をした結果、殆どの高径項目と矢状径項目に有意差がみられた。

参考文献

- 1) 福井弥生、畠山絹江、奥村 重：靴着用時の姿勢に関する考察、日本人間工学会関西支部大会発表要旨集(1994.11)

因子得点によるヒール高別比較